

## おわりに

以上のように今回の研究では、第三セクター鉄道の成立経緯から始まり、具体例も取り上げながら、第三セクター鉄道自身とその沿線地域の将来のあり方まで書いてきました。第三セクター鉄道が将来も地域社会の一翼を担うにはどうしていけばよいかを、部員一人ひとりが真剣に考えてきましたが、読者の皆様にはどれだけ伝わりましたでしょうか。

これまでも当研究会では、第三セクター鉄道に限らず、地方のローカル線を題材とする研究が少なからずありました。それらは鉄道会社に限らず企業の最大目標が、最大限利益を出さなければならないことであるという状況で、赤字を出しているローカル線は、できるだけ赤字を減らさなければならないという部員の思いがあったからこそその研究だったのだと思います。やはり、利用客がほとんどいない鉄道を明らかに利用客数に見合わない多額の費用をかけて支える図式を見て、「この鉄道は本当に運行する意義があるのか」と疑問に思わない人は、ほとんどいないのではないのでしょうか。存在意義を疑う声が高まるからこそ、地方ローカル線の運営会社はこれまで可能な限りの収益改善策や費用削減策を考え、それを実行に移してきたのではないかと思います。できる限りの経営努力をしたとしてもこれ以上の経営の継続は困難と判断し、廃止の決断を下した鉄道も、場合によってはありました。

1995年に中央から地方への権限と財源の委譲を促進させる地方分権推進法が施行されてから今年で10年が経ちました。施行後、地方分権が声高に叫ばれるようになりましたが、最近第三セクター鉄道の通る地域でも市町村合併が盛んに行われているように、ようやく地方分権の考え方が人々に浸透してきたのではないかと思います。地方分権をすることは、わかりやすく言えば「地方は何をしてもいいけど、その代わりやったこと責任は地方でもちなさい」ということです。この考えは、第2部の最後まで述べたようなこれからの第三セクター鉄道のあるべき姿とも重なるのではないのでしょうか。

今でも多くの人が「どうせあの鉄道は空気をのせているだけなのになぜ走っているのか」という気持ちを少なからず持っているのではないかと思います。これは、収益よりも費用が大きいのに走っているのはおかしいという前述の考え方を表したものに他なりません。もちろんこの採算性の考え方が完

全に間違っているとは私たちは思いませんし、最も重要な基準であると断言できます。本研究開始前も、当研究会の部員の中には、採算の取れないところは鉄道として走らせるべきでないと考えている人もいました。しかし、それだけが第三セクター鉄道を切り捨てる基準ではありません。いくら空気しか輸送していないと揶揄されても、沿線住民がその鉄道が必要だと判断するならば、住民の声が直接届く自治体が多く割合を出資する第三セクター鉄道を走らせる意義は十分にありとします。

とはいえ、第三セクター鉄道を無条件で走らせてよいわけでないのはこれまで本誌で述べてきたことからみて明らかでしょう。とりわけ、本誌で鉄道存続のために強調されているのは、住民のマイレール意識の向上や観光需要の掘り起こしといったことでした。自治体が出資している第三セクター鉄道だからこそ、住民が第三セクター鉄道に対する関心を高め、積極的に活用していかなければならないのです。第1部第1章でも触れたように、第三セクター鉄道の中には交流人口の増加に貢献した例もあり、地域がどのように鉄道を活かしていくかが鉄道や地域の維持の鍵になってくると言えるでしょう。

のと鉄道の「将来への展望」の部分では北陸新幹線の開通の話題に触れましたが、10年、20年後に整備新幹線が開通することが予定されています。そのときには従来の在来線がしなの鉄道のような並行在来線型の第三セクター鉄道として再出発することが予想されていますが、これらの新しい第三セクター鉄道でも、住民に対して求められているのは同じものだと思います。

もちろん、現実について廃止されてもおかしくない第三セクター鉄道もあることは厳然たる事実として受け止めなければなりません。しかし、そのような路線であっても安易な廃止をしてよいのか、もう一度考え直す必要があるでしょう。「廃止をする」と言うことは簡単ですが、実際にそれを行うことはやさしくはない、という印象を私たちは今回の実地調査から受けました。一度廃止してしまえば、後にその路線が必要となっても鉄道を復活できる可能性はゼロに近いと言っても過言ではありません。

加えて第1部で示した三木鉄道の沿線のように、鉄道を市民の財産として認識する考えもあります。第三セクター鉄道に単なる移動手段以上の価値を見出せば、第三セクター鉄道を維持していく妥当性は増していくといえるでしょう。鉄道の付加価値がどの程度で、鉄道が必要であるかを判断するのは結局のところ沿線住民であり、その沿線住民が鉄道を必要と判断する限り、可能な限りの方法で第三セクター鉄道を維持してほしいと願ってやみません。